

## 紹介患者における「自覚症状の出現頻度」と「口腔機能低下症」との関連性

**Relationship between "frequency of subjective symptoms" and "oral hypofunction" in referred patients**

○栗山陽菜<sup>1</sup>, 横矢隆二<sup>2</sup>, 長屋優里菜<sup>1</sup>, 市川清香<sup>1</sup>, 野村玲奈<sup>1</sup>, 岩尾 慧<sup>2</sup>, 服部景太<sup>2</sup>,  
友藤孝明<sup>3</sup>, 藤原 周<sup>2-4</sup>

○Hina Kuriyama<sup>1</sup>, Ryuji Yokoya<sup>2</sup>, Yurina Nagaya<sup>1</sup>, Sayaka Ichikawa<sup>1</sup>, Rena Nomura<sup>1</sup>,  
Satoshi Iwao<sup>2</sup>, Keita Hattori<sup>2</sup>, Takaaki Tomofuji<sup>3</sup>, Shu Fujiwara<sup>2-4</sup>

<sup>1</sup>朝日大学医科歯科医療センター 歯科衛生部 <sup>2</sup>朝日大学歯学部 包括支援歯科医療部

<sup>3</sup>朝日大学歯学部 口腔感染医療学講座 社会口腔保健学分野

<sup>4</sup>朝日大学歯学部 口腔機能修復学講座 歯科補綴学分野

<sup>1</sup>Department of Dental Hygiene, Asahi University Medical and Dental Center

<sup>2</sup>Department of comprehensive Dental Support, Asahi University Medical and Dental Center

<sup>3</sup>Department of Community Oral Health, Asahi University School of Dentistry

<sup>4</sup>Department of Prosthodontics, Division of Oral Functional Science and Rehabilitation

Asahi University School of Dentistry

【緒言】 2018 年の診療報酬改定で口腔機能低下症（以下、低下症）が保険収載され、歯科医療における口腔機能管理の重要性が高まってきている。このような状況下において、朝日大学医科歯科医療センターは、低下症に対応する部署を設けている。今回我々は、潜在的な低下症患者の実態を把握するため、他科から紹介された患者を対象に、自覚症状の出現頻度と低下症との関連性について調査を行ったので報告する。

【対象および方法】 低下症の疑いで紹介された患者 56 名（男性 30 名、女性 26 名、平均年齢 73.1 歳）を対象とした。口腔機能に関する 9 項目（①咬みにくさ②飲み込みにくさ③水分摂取時のムセ④咽頭残留感⑤食事時間⑥口腔乾燥感⑦呂律不良⑧会話時の疲労⑨口腔残留感）について自覚症状の出現頻度を「いつも」「ときどき」「なし」の 3 段階で自記式調査した。口腔機能精密検査を実施し、低下症の該当群と非該当群での自覚症状の出現頻度の比較には、 $\chi^2$  検定を用いた。なお、本研究は朝日大学倫理審査委員会の承認を受けて実施している（承認番号 34016）。

【結果および考察】 低下症の該当者は 56 名中 45 名（80.4%）であった。各年代別での割合は、40-64 歳 12.5%、65-74 歳 39.3%、75 歳以上 48.2%であった。自覚症状との関連については、質問②③⑦⑧⑨で、該当群と非該当群で出現頻度に有意な差を認めた（ $p < 0.05$ ）。これらの結果より、患者の機能的不調の訴えは低下症と深く関連していることが示唆された。問診時に上記 5 項目の自覚症状の出現頻度が「ときどき」以上と回答した患者は、口腔機能の低下を強く疑うことができ、精密検査を行うことで低下症の早期発見・早期介入に貢献できると期待される。

【結論】 当センターにおける低下症の該当群と非該当群では、飲み込みにくさ、水分摂取時のムセ、呂律不良、会話時の疲労、口腔残留感の出現頻度に有意な差を認めた。